

小 ・ 中 学 校

平成 2 7 年度

教育研究員研究報告書

小 ・ 中 学 校
図画工作 ・ 美術

東京都教育委員会

目次

I	研究主題設定の理由	1
II	目指す児童・生徒像	2
III	研究の仮説	2
IV	研究の視点	3
V	研究方法	4
VI	研究の内容	
1	研究構想図	5
2	検証授業	6
VII	成果と課題	
1	中学校	2 1
2	小学校	2 2
3	小中合同	2 4

【研究主題】

学びの過程の中で 協働的な活動を効果的に取り入れる指導の工夫

I 研究主題設定の理由

本研究は、小学校図画工作科と中学校美術科の合同部会として、義務教育段階での子供の発達や教育の連続性を踏まえ、教科の目標を主体的に実現する児童・生徒の姿を、協働的な学びを通してかなえることを主眼とした。造形教育におけるアクティブ・ラーニングの視点に立った具体的な指導の手だてについて検討し、児童・生徒の造形的な創造活動の基礎的な能力の向上を目指すものである。

研究主題の検討に先立ち、研究員が所属する各学校の図画工作・美術の学習における児童・生徒の現状について協議したところ、「想像力を働かせようとする意識が低い」「自分なりの表現を深めることが難しい（追求心が弱い）」「失敗を怖がる（自信がない）」「内的な欲求ではなく評価などの外的な理由で表現している」「指示待ちである」「自力解決能力が低い」「造形的、体験的な遊びの経験が少ない」という課題が挙げられた。

「特定の課題に関する調査—小学校図画工作・中学校美術—」（平成21年度実施、国立教育政策研究所教育課程研究センター）によると、小学生の図画工作の学習に対する意識調査では、関心・意欲に関する八つの質問項目で肯定的な回答が93.7%～64.6%と過半数以上となっており、児童の図画工作に対する関心・意欲は比較的高いことが分かる。しかし、表現活動において、「自分でかき方やつくり方を考えたり、表し方を工夫したりすることは好きですか」ということについては、否定的な回答が32.8%と、他の調査項目と比較して多くなっている。

この結果から、「作品をつくること自体は好きであるが、自分でかき方やつくり方を考えたり、表し方を工夫したりすることは苦手」という意識があることが読み取れる。

また、「小学校学習指導要領実施状況調査」（平成25年度国立教育政策研究所教育課程研究センター）では、発想や構想の能力にあたる「表したいことを見付けて表すこと」、特に、「想像したことから表したいことを見付けて表すこと（表現の始まりにおける発想や構想の能力）」に課題があることが指摘されている。

表現及び鑑賞の活動における、「みる・かく・つくる」などの行為は、本来、内発的な動機によって自然と行われるものであり、大部分の児童・生徒にとって楽しいもの、好きなものである。しかし、造形的な行為や体験をきっかけにして、自分なりのイメージを生成し、工夫して表現を追求することについては、苦手とする児童・生徒も多くいるのが現状である。

その要因として、教師の指導に、最終的な作品の巧拙で優劣を判断する作品主義的な傾向があることや、作品の完成形やそれに至るまでの過程を教師の意図に基づいて固定化するといった、教師主導型の作業的な授業が行われていることなどが考えられる。

図画工作・美術科の学習活動は、表現及び鑑賞の活動を通して児童・生徒一人一人が思いをもって表現方法を探り、試行や自己決定を繰り返す中で、自分なりの意味や価値を見だし、表現を追求していくことに重要な意味がある。児童・生徒が活動を通して内発的な欲求からの表現をすることで達成感や充実感を得るために、児童・生徒の活動の過程を大切にし、一人一人に寄り添った学習状況の把握や個に応じた指導を充実させていく必要がある。

「特定の課題に関する調査」では改善のための手だてとして、「話し合う活動を取り入れる」など、小・

中学校ともに人との関わり（小学校ではものとの関わりも含む）の充実を挙げている。これらはいずれも図画工作・美術科の授業内において必然的に行われる、協働的な学びの場面である。

例えば、鑑賞の活動における「話し合う活動」では、自分の価値意識をもって伝え合ったり批評し合ったりすることで、他者との価値意識の違いや多様性に気付くことができる。

こうした他者との関わりをきっかけにして、広い視点をもてるようにすることが、自ら表現したいという内発的な動機を高めることにもつながると考える。

しかし、現在、図画工作・美術科の授業で、一見すると、協働的な学びを行っているように見えても、教師の指導について、「放任」又は「児童・生徒に気付いてほしいことまで教師が教えてしまっている」などの課題も見受けられる。「どのような力を身に付けさせたいのか」「何のための活動なのか」を明確にした活動でなければ、活動があっても成果のないものになってしまう。

そこで、今回は、身に付けさせたい資質や能力を明確にし、それを身に付けさせるためにどのような授業を展開するとよいのかについて改めて検討したい。そして、一つの活動が次の活動に生き、全体の学びの過程を経ることで、児童・生徒の資質や能力を効果的に育成するといった、充実した学びの過程を追究したい。

また、「発想や構想の能力」に課題があることから、児童・生徒が自ら思いをもち、表現したいことを実現するために、学びの過程で協働的な学びの場を意図的に設定することで、発想や構想を深めることができたり、思いを表現する手だてを獲得できたりするのではないかと考えた。

材料やテーマをもとに児童・生徒自身が主体的に活動に取り組み、互いの感じ方や表現の良さに共感したり認め合ったりすることで新たな価値を生成することができる図画工作・美術科の学習活動は、いわゆるアクティブ・ラーニングの視点に立った学習形態を元来備えている。図画工作・美術科の授業だからこそ実現可能な協働的な学びについても提言していきたい。

II 目指す児童・生徒像

今回、小中合同図画工作・美術部会として、小学校・中学校の学びの連続性を意識し、義務教育9年間の視点から目指す児童・生徒像を考えた。

小学校：人やものとの関わりながら、表したいことを見付け自分らしさを発揮しながら表現する児童

中学校：他者との関わりから見方や感じ方を広げ、創意工夫して表現する生徒

III 研究の仮説

学びの過程に、協働的な活動を効果的に取り入れることで、児童・生徒が自己を見つめ、発想構想の能力を高めることができるのではないかと。

小学校では、それにより、更に自分の表現を追求することができるのではないかと。

中学校では、他者と異なる自分独自の答えを生み出す力を高めることができるのではないかと。

図画工作・美術科の学習活動における児童・生徒の行為は、「出合う・おもう・ためす・えらぶ・あらわす・みる」に分類されると言われる。本研究では、この学びの過程の中でも特に「おもう・えらぶ・あらわす・みる」に焦点を絞って研究を進めることにした。この過程に「協働的な活動」を取り入れていくことで発想や構想の能力を高めることができると仮定し、その具体的な方途を検討、立案、実施、検討して、明らかにしていくことが研究のねらいである。

さらに小学校と中学校に分けて仮説を深めた。小学校では、協働的な活動を取り入れることで児童に、より「自分の表現を追求する」態度が育まれるだろうとした。それは、授業中に時間が過ぎるのを忘れるほど熱中し自分の表したいことに向かって、試行を繰り返し、行きつ戻りつしながら自分が納得するまで表わそうとする姿である。熱中し、「自己決定」を積み重ねながら目標に到達できたときに得られる「自分は『できた!』」という喜びこそが「追求」した結果得られる自己実現である。それは、「自分らしさ」の発揮の喜びであり、自分の表したいことや自分なりの表し方を見付け、それを実現しようと試行した先にある達成感・充実感を味わうことであると考えた。

中学校の仮説にある「他者と異なる自分独自の答え」は、個人で生み出すこともできるが、他者・自分それぞれが言葉や作品などで表したい「思い」を共有したり、すり合わせたりするといった協働的な活動を行うことで、「自分らしさ」を実感し、より深められると考えた。

図画工作・美術科の学習活動は、一つの正解や複数の正解を求める学習活動ではない。児童・生徒が自分としての「答え」を生み出す学習活動である。したがって、個々の表現に大きな意味がある。協働的な活動を効果的に取り入れることが、児童・生徒の試行錯誤を促し、発想や構想の能力を高め、他者理解や自分らしさの実感を深め、自分としての「答え」を生み出すことにつながると考える。協働的な学びでは、気付きを得られるだけでなく、互いの良さを知り、認め合うことも多く行われる。自らが表現したことを認められる、理解してもらえんということは、自分自身の存在を認められ、理解されるということになる。このような活動の積み重ねが、自己肯定感を高めることにつながると考える。

IV 研究の視点

「何を教えるか」という知識の質や量の改善はもちろんのこと、「どのように学ぶか」という、学びの質や深まりを重視する必要がある。「どのように学ぶか」という点に着眼し、学びの過程に、協働的な学びの場を提案することで、児童・生徒が主体的に表現できるのではないかと考え、以下の2点の指導の工夫を提案する。

(1) 学びの過程・・・「おもう・えらぶ・あらわす・みる」

本研究での学びの過程である「おもう・えらぶ・あらわす・みる」について、まず指導案を作成する際に、それぞれの場面での児童・生徒の反応等をできるだけ多く予想し、それに対しての具体的な手だてを教師側が準備しておく。実際の授業では予想していたことも予想できなかったことも含め、一つ一つの過程で、児童・生徒が自分の思いをもち(思考力)、自分で選択決定し(判断力)、表現しながら鑑賞することで次への表現に生かすこと(表現力)を大切にした授業展開をすることで、児童・生徒が主体的に活動に取り組みながらそれぞれの能力を発揮し、その伸長が図られると考える。

(2) 協働的な活動・・・「活動形態の工夫」、「鑑賞活動の設定」

活動形態の工夫とは、児童・生徒の発想力・構想力を高めるため、表現活動の際、「個」「グループ」「全体」と活動形態を効果的に変えて行うことである。

鑑賞活動の設定は、全体で一斉に行う鑑賞活動と、個への声掛けによる鑑賞活動とを効果的に取り入れることである。後者は、表現活動をしている途中で教師がねらいに則した視点で児童・生徒の作品を抽出し個別に声掛けをする。個への声かけが児童・生徒全員の自発的な鑑賞を促し、その

結果、一人一人の表現活動に生かすことができると考える。

このような活動を行うことで児童・生徒が互いに働きかけたり働きかけられたりしながら、発想や構想の能力など、表現及び鑑賞に関わる資質や能力が一体的に補い合って高まると考える。

V 研究方法

1 基礎研究

(1) 先行研究の分析・検討

以下の参考文献から、本研究の裏付けとなる内容を調査・検討し、本研究の根拠とする。

(主な参考文献)

ア 「特定の課題に関する調査—小学校図画工作・中学校」

(平成 21 年国立教育政策研究所教育課程研究センター)

イ 「小学校学習指導要領実施状況調査」

(平成 25 年国立教育政策研究所教育課程研究センター)

ウ 「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方について（諮問）」

(文部科学省・中央教育審議会)

エ 「図画工作科、美術科、芸術科（美術、工芸）の現状と課題、改善の方向性」

(検討素案) (教育課程部会等の審議を踏まえて再整理したもの) (文部科学省)

オ 「言語活動の充実に関する指導事例集～思考力、判断力、表現力等の育成に向けて～」(文部科学省)

2 実践研究

研究主題・仮説に基づいた題材設定、題材開発を行い、前述した手だてを講じた指導方法で授業を実践する。また検証授業によって、指導方法が有効であったかを検証及び分析し、研究協議で成果と課題を明らかにする。

VI 研究内容

1 研究構想図



2 検証授業 中学校

1 題材名 デザイン「レタリング・絵文字」 A表現 (2)イ (3)ア 対象 第2学年

2 題材の目標

- ・絵文字やレタリング文字を用いて伝えたい内容を多くの人々に伝えるために、形や色などの効果を生かして分かりやすさや美しさなどを考え、表現の構想を練る。
- ・ポスターカラーの特性を生かし、自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして創造的に表現する。

3 題材の評価規準

	ア 美術への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	題材に関心をもち、主体的に構想を練り、制作を進めようとしている。	目的や条件を基に、美的感覚を働かせ、形や色彩などの構成を考え、表現の構想を練っている。	自分の表現意図に合う新たな表現方法を工夫するなどして創造的に表現する。見通しをもって表現している。	造形的なよさや美しさ、作者の意図や工夫、調和の取れた美しさなどを感知し見方を深め、美意識を高め幅広く味わっている。
共通事項の視点から見た学習活動の具体的な評価規準	デザインの内容を理解し、漢字を選ぶこと、絵文字で表すこと、言葉を選ぶこと、アイデアを吟味することを積極的に行っている。	伝えたい内容が伝わりやすいように、背景・絵文字やレタリング文字について、形や色彩の構想を練っている。	描き方、塗り方の様々な方法を試しながら自分らしく工夫し表現する。美しく仕上がるように見通しをもって進めている。	絵文字としての形の美しさや色彩との調和、作者の表現意図などを感知し、自分の価値意識をもち味わっている。

【評価規準に反映されている共通事項】

第2学年および第3学年

- ア 形や色彩、材料、光などの性質や、それらがもつ感情を理解すること。
- イ 形や色彩の特徴などを基に、対象のイメージをとらえること。

4 研究主題との関連

(1) 学びの過程…本題材では、生徒が「おもう」「えらぶ」「あらわす」「みる」の活動を繰り返しながら試行錯誤し自己決定を積み重ねることで、創意工夫し表現する力が向上すると考えた。

学びの過程	学びの過程における生徒の具体的な活動
おもう (思考)	<ul style="list-style-type: none"> ・絵文字にする漢字の意味を考え、組み合わせる言葉、形、色について考える。 ・友達に作品の途中経過を見てもらう過程の中で感想や意見をもらい、表現したいイメージと照らし合わせる。

えらぶ (判断)	<ul style="list-style-type: none"> ・出したアイデアの中から、絵文字のデザインに合う言葉、形、色を選ぶ。 ・友達からもらった意見から見方を広げ、自分のイメージに合う形や色を選ぶ。
あらわす (表現)	<ul style="list-style-type: none"> ・鑑賞した作品や友人から得た発想をもとに絵文字のデザインをする。 ・レタリングやデザインの基礎技法を学び、美しく仕上げるための描き方、塗り方を工夫する。
みる (鑑賞)	<ul style="list-style-type: none"> ・友達のアアイデアスケッチや下絵、完成作品を、作者の表現意図や絵文字のイメージに合う形や色に着目しながら鑑賞する。

(2) 手だて ★協働的な活動

題材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・作品コンセプトを深く考えさせ、学習シートに記入させる。 ・言葉選び、アイデアスケッチ、下絵、本描きといった表現の段階の中で、表現したいイメージに合う形や色を試行錯誤させる。
発話の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・「表現したい自分のイメージ」「自分がない発想」「形や色の工夫」「効果的なデザイン」に着目させる発問を行う。
環境の設定	<ul style="list-style-type: none"> ★グループトークの際、一つの小机を四人で使わせ、話し合いがしやすい環境をつくる。 ★拡大投影機を使い、制作方法や作品を全体で見やすい環境をつくる。
交流場面 鑑賞の設定	<ul style="list-style-type: none"> ★生徒同士でアイデアや作品を鑑賞し合い、感想や意見を交換する場面を設定する。 ★自分や友達の話したり聴いたりしやすいグループ活動を取り入れる。
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・座席表を活用し、生徒の活動の様子を見取る。 ・思考、判断、表現、鑑賞の過程を振り返る学習シートを活用する。

5 指導観

(1) 題材観

漢字そのものもっている意味をより分かりやすく伝えるために、部首や点画をイラストに置き換えたり変形させたりしながら絵文字をつくり、伝えたいイメージを形や色で表現する学習である。また、絵文字に合う言葉をつけることは、自分の考えを表したり、絵文字の意味をさらに引き立てて伝えたりすることを可能にし、生徒の思考力、判断力、表現力を形や色だけでなく言語によっても表現させることのできる活動である。伝えたいイメージが多くの人々に伝わるように、形や色をどのように組み合わせれば効果的かを試行錯誤させ、表現の構想を深く練らせることができると思う。

(2) 教材観

ポスターカラーの性質は不透明水彩であり、小学校時に使用していた絵の具と近い性質を持っており、水溶性で使用しやすく親しみやすい描画材である。「平塗り」以外にも透明水彩風に使用することも可能であり、一年時にはその使い方を学習させているため、この題材では、ポスターカラーでできる様々な表現方法を創意工夫させたい。また「レタリング文字」や「絵文字」は日常生活においてとても身近なものであり、美術の授業以外でもポスターや新聞等の制作に生かすことができるモチーフである。生活の中で生かすやすく、また社会の中で生かされているものを目にするのも多く親しみやすい教材であると思う。

(3) 材料・用具

生徒…クロッキー帳、画用紙、ポスターカラーセット、筆洗

教師…配色カード、学習シート、拡大投影機、液晶画面

6 題材の指導計画と評価計画 (15時間) ※ 過程 : 学びの過程 協働的な活動

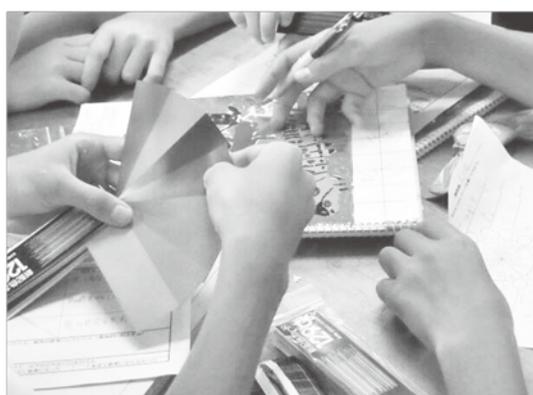
次	時	過程	◎学習内容 ・学習活動	○指導上の留意点 T : 教師の発問	評価
1	1	おも	◎デザイン作品を鑑賞し、様々な分野があることを知る。作品例を基に、レタリング文字や絵文字について理解する。 ・「永」を明朝体で描く。	○デザインの性質や用途による表現方法の違いに気付かせる。 ○レタリング文字を実際に描くことで作品づくりの見通しをもたせる。	【ア】 (観察) 【ウ】 (作品)
	2	あらわす			
2	3	あらわす みる	・絵文字にしてみたい漢字と、組み合わせる文字を学習シートに思い付くままに書き出す。 3分間で、クラスメイトのアイデアを鑑賞し合う。	○決定案ではなく、候補を出せばよいことを伝え、たくさんのアイデアを出させる。 様々な言葉の選び方があることに気付かせる。なぜ、その組み合わせにしたのかについて話しながらか鑑賞させる。 T「どんな漢字に、どんな言葉を組み合わせているか見てみよう。友達のを聞いてみよう。」	【ア】 (学習シート) 【エ】 (観察)
3	4	あらわす	◎絵文字の作り方を学ぶ。 ・文字の中に入れるイラストのアイデアスケッチを描く。 ・イラストを漢字の点画などに置き換えながら絵文字を作る。 3分間で、クラスメイトのアイデアを鑑賞し合う。	○上手に描くことよりアイデアの豊かさや創意工夫することの大切さを指導する。 ○伝えたい内容が伝わるようなデザインになるよう留意させる。 漢字の点画をどのように絵に変えているか、漢字と組み合わせた言葉からどのような発想をして絵文字にしているかに着目しながら鑑賞させる。 デザインの工夫ポイントを話しながらか鑑賞させる。 T「点画をどのような形に置き換えてデザインしているか見てみよう。友達のを聞いてみよう。」	【イ】 (作品) 【エ】 (観察)
	5	えらぶ みる			
	6	あらわす			
7	あらわす				
4	8	おも	◎色について学ぶ。 ・配色計画を立て始める。 ・学習シートに作品コンセプトを記入する。 四人グループをつくる。 一人につき5分間で配色計画を語り合い、意見を出し合う。語り合った内容やアドバイスをワークシートに記入する。 ・ポスターカラーで画用紙に彩色する。	○色相、明度、彩度、純色、補色、配色の工夫について意識しながら計画を立てさせる。 意見を出し合うことで視点が広がり、効果的な配色ができるようになることを伝える。 T「発表者は、自分の作品コンセプトを具体的に話そう。聞き手は、そのコンセプトが効果的に伝わるにはどのような配色がいいか、意見を出し合おう。」 ○最終的には、自分自身で配色を決定させる。 ○美しく仕上がるよう見通しをもって彩色するよう指導する。	【エ】 【イ】 (観察) (学習シート) 【ウ】 (作品)
	9	おも			
	10	おも			
	11	みる			
	12	えらぶ			
13	あらわす				
14	あらわす				

5	15	おも みる	<ul style="list-style-type: none"> 作品づくりを振り返る。 クラスメイトの作品を鑑賞し合う。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 工夫されている点、美しいと思っ た点などを伝え合う。 </div> <ul style="list-style-type: none"> 鑑賞会全体の感想をまとめる。 	<ul style="list-style-type: none"> ○表現意図や作品のポイントにつ いてワークシートに記入させる。 ○「情報をうまく伝えるデザインに は、どのような工夫が見られるのか」 ということに注目させて鑑賞させる。 <div style="border: 1px dashed black; padding: 5px; margin: 10px 0;"> 工夫していると思った点を具体的 に話させ、聞き合うことで発想の 方法を学び合う。 </div> <p>T「漢字の意味を引き立てている絵文字のデザイン には、どのような工夫が見られるか、絵文字のデザ インと色が調和している作品には、配色にどのよう な工夫が見られるか、に着目して鑑賞しよう。」</p>	【エ】 【ア】 (学習 シート)
---	----	----------	--	---	---

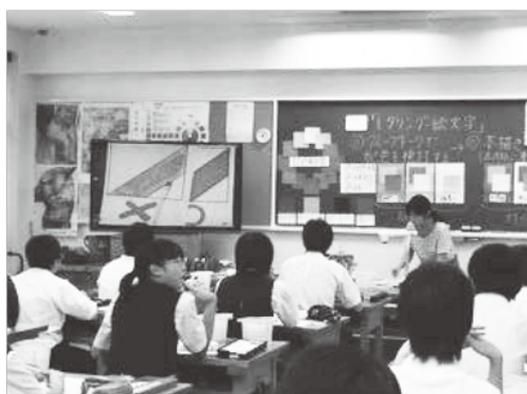
【ワークシート例】

グループトークで配色案を検討する

①作品コンセプトについての説明（※クロッキー帳は見せないで説明をする）			
②配色について、迷っていること、アドバイスをもらいたいことなど（※クロッキー帳を見せながら説明をする）			
なまえ	③もらった具体的なアドバイスなど		
1			
2			
3			
④グループトークをして、気がついたこと、配色の参考にしたいこと（具体的に記入する）			
⑤グループトークで配色案を検討してみて…以下のどれかに○を付ける			
	とても参考になった	少し参考になった	あまり参考にならなかった



【下絵・配色カード・学習シートを使い、グループトークしている様子】



【拡大投影機を使った授業風景】



【完成作品例】

7 手だてに照らし合わせた成果と課題

○成果 ●課題

<p>題材の工夫</p>	<p>○配色カードはイメージした色が具体化してあるツールであるため、色のイメージが伝えやすく有効だった。言葉にしにくい色のイメージを共有し合う活動に有効だった。 ●作品コンセプトを考えさせる際、思いや理由を細かく書かせられるとよい。例えば、下絵自体に配色の理由を書き込ませる、など。</p>
<p>環境の設定</p>	<p>○四人組でのグループトークは話し合いがしやすく、協働的な活動として機能していた。 ○拡大投影機は、制作方法や作品を全体で共有する活動に有効だった。ポスターカラーの溶き方や塗り方などは、拡大投影機で実際に見ることで、微妙な加減を理解することができていた。</p>
<p>交流場面 鑑賞の設定</p>	<p>○批評し合う活動ができていた。グループトークでアイデアを出し合ったことがとても参考になったと答えた生徒がほとんどだった。 ○ストップウォッチを使用し、一人5分間でグループトークを行った。話し手は、伝えたいことを明確にする意識が高まり、聞き手は、話し手の考えを理解し、自らの考えを伝えることに専念できていた。互いに考えを述べ合う活動の設定として効果的だった。 ○対話が苦手な生徒や対話が滞っているグループに対し、教師がサポートに入り、生徒の思いを聞きながら言葉にしたり、視点を与えたりすることで、制作者は作品に込められた思いを伝えることができ、聞き手は受けた印象を伝えると同時に、制作者の思いを作品に反映できるようなアドバイスをを行うことができた。 ●グループトークの際、強い意見をもっている生徒の発言に流されていた生徒がいた。各個人に事前に自分の作品コンセプトをよく考えさせておくことや、自分が表現したいイメージともらったアドバイスを照らし合わせ、「最後は自分で決める」意識をもたせることが大切であることを再確認できた。 ●グループトークの内容を全体で共有する場面があるとよい。 ●対話が広がるように、対話の方法を明示しておくとうい。例えば、学習シートに質問の仕方などを書いておく、発表者に一つは質問する、など。</p>

検証授業 小学校①

1 題材名 「つぎ・つぎつぎ」 A表現 (2) B鑑賞 (1) 全6時間 対象 第5学年

2 題材の目標

電動糸のこぎりを用いて板材を切り分け、切り分けた形からイメージを膨らませるとともに、組み合わせ方を工夫しながら、自分の思いを立体に表す。

3 題材の評価規準

	ア 造形への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	電動糸のこぎりを使って板材を切り分け、組み合わせる活動に進んで取り組んでいる。	切り分けた板材の形を基に、面白い組み合わせ方を考えている。	安全に電動糸のこぎりを使いながら、板材の切り方や組み合わせ方を工夫している。	板材を切り分け、組み合わせでできた立体作品の形の面白さを感じ取っている。
共通事項の視点から見た学習活動の具体的な評価規準	①板材を自在に動かしながら切り分けることを楽しもうとしている。 ②切り分けた板材の形からイメージを膨らませ、組み合わせることを楽しもうとしている。	①切り分けた形の特徴から、自分の表したいイメージを膨らませている。 ②友達の製作活動から、切り分け方や組み合わせ方などの造形的な特徴を捉え、自分の作品に生かそうとしている。	①電動糸のこぎりを用い、板材を自在な形に切り分けている。 ②かきつぎを正確につくり、組み合わせ、板材をつなげている。	①切り分けた板材の形や組み合わせ方などの造形的な特徴から、作品の良さや面白さを感じ取っている。 ②自他の作品について話したり、友達と話し合ったりすることを通して、表し方や感じの違いなどを分かろうとしている。

【評価規準に反映されている共通事項】

第5学年及び第6学年

ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、動きや奥行きなどの造形的な特徴をとらえること。

イ 形や色などの造形的な特徴を基に、自分のイメージをもつこと。

4 研究主題との関連

(1) 学びの過程…本題材では児童が以下の「おもう」「えらぶ」「あらわす」「みる」の活動を繰り返しながら自己決定を積み重ねることで、児童の表現力が向上すると考えた。

学びの過程	学びの過程における児童の具体的な活動
おもう (思考)	・題材名から、活動のイメージを膨らませる。 ・友達の活動からおもしろい切り方・組み合わせ方を見付ける。
えらぶ (判断)	・切り分けた形の特徴を基に組み合わせ方を考える。 ・友達の活動から参考にできる部分を見付け、自分の活動に取り入れようとする。

あらわす (表現)	<ul style="list-style-type: none"> ・電動糸のこぎりを用いて、板材を自在に切り分ける。 ・切り分けた形の特徴を基に組み合わせる。 ・参考にできる友達の活動を取り入れながら自分の表現を深める。
みる (鑑賞)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のイメージを膨らませるために、友人の製作途中の作品を随時鑑賞する。 ・友達の作品のよい部分を見付けようとするこゝで、鑑賞を深める。

(2) 手だて ★協働的な活動

題材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が自分の表したい活動をイメージできるような題材名を設定・提示する。 ・児童に多くの「学びの過程」の場面を経験させる題材を設定する。
発話の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・児童のイメージを膨らませたり考えを引き出したりすることをねらいとする発話・発問を意識する。
環境の設定	<ul style="list-style-type: none"> ★グループ形態の机配置にし、友達と必然的に関わる場面を設定する。 ★電動糸のこぎりを一ヶ所にまとめ、設置場所までの移動時に友人の活動を参考にさせる。
交流場面 鑑賞の設定	<ul style="list-style-type: none"> ★電動糸のこぎりの設置場所から自席に戻る際、自分の活動の様子を友人に必ず伝える。 ★友達の作品と組み合わせる場面を設定する。 ★友達のよい部分を参考にしつつ、自分のイメージを膨らませていく手だてとして、製作途中の作品を随時鑑賞する場を設定する。 ・鑑賞する視点を指導者が示すことにより、児童の鑑賞を深めさせる。
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・座席表を活用し、活動の様子を見取る。 ・児童の自己評価につながる学習シートを活用する。

5 指導観

(1) 題材観

本題材は、一枚の板材を電動糸のこぎりで切り分けていき、切り分けてできた板材の形からイメージを膨らませ、板材同士の組み合わせ方を工夫しながら立体にしていく活動である。児童に板材を思いのままに切り分ける楽しさや、切り分けた形からイメージを膨らませる楽しさを感じさせることで、児童自らが自分なりの表したい表現方法を見付けようとする意欲につながるのではないかと考えた。また、電動糸のこぎりの設置場所を自席にせず、一ヶ所にまとめることで、設置場所まで移動する時に友人の活動をみたり、設置場所で友人の切り方を参考にしたりするような、児童自らが自発的に鑑賞活動できる場面が生まれるのではと考えた。このような鑑賞活動を協働的な活動と捉え、指導者が意図的に設定することで、他者との関わりが必然的に増え、広い視点をもてるようになり、児童の発想・構想の能力が高まるのではないかと考えた。

(2) 教材観

電動糸のこぎりは、板材を直線にも曲線にも切り分けていくことができ、切ることそのものを楽しむことができる用具である。電動糸のこぎりを使用することに夢中になり、細かく切り分けすぎると、組み立てる時に大変になってしまうため、授業展開の導入時には、あまり細かく切り分けし過ぎないように

		<p>おもしろ あはわす</p> <p>えらぶ</p> <p>あはわす みる</p> <p>3 本時</p> <p>4</p> <p>5</p> <p>えらぶ</p> <p>あはわす みる</p> <p>おもしろ えらぶ</p>	<p>◎電動糸のこぎりを使う。</p> <p>友達に紹介する。 「こんなの切れました」</p> <p>◎組み合わせ方法を確認する。 ・『かきつぎ』をつくる。 ・板材を更に切り分ける。 ◎組み合わせ方を工夫する。 ・『かきつぎ』を足す。</p> <p>友達に紹介する。 「こんなの組み合わせました」</p> <p>友達の活動から視点を学ぶ。 「△△さんの組み合わせ方 面白いね」</p>	<p>○切り方についてのイメージが膨らむ発問を意識する。 T「出合ったことの無い形に分けよう」 ○糸のこぎりが設置してある場所に行くまで、糸のこぎりを使用する時に友達の活動を見るように促す。 T「他の班はどんなつくり方をしているかな？」 友達のよい部分を見つける</p> <p>○自席に戻る時に、友達に自分の活動を紹介するよう指導する。 T「せっかく見つけた形なので、班の人に教えてあげよう。」 発表側は自分の思いを伝えることで、表現力を高める。受け手側は、発表者の活動を鑑賞することで、発想の能力を高める。</p> <p>○面白い形に組み合わせるよう指導する。 ◇何度でも組み替えながら面白い形を見付けるよう指導する。 ○前回までと同様に、周囲の活動の様子を鑑賞しながら活動するよう適宜指導する。 鑑賞の場を意識しながら活動することで、発想力を高める。</p> <p>T「『こんなの組み合わせました』と組み合わせた形を報告しよう。」 ◆悩んでいる児童には、友達の活動を参考にしながら組み合わせ方を考えるよう指導する。 T「クラスの中で参考になる組み合わせ方をしている人いたかな？」 T「取り入れたかったら参考にしてみよう。」 友達の活動を参考にしながら自分の発想力を高める。</p>	<p>【ウ①】 (観察)</p> <p>【イ②エ①】 (観察)</p> <p>【ア②】 (観察)</p> <p>【ウ②】 (観察)</p> <p>【イ①エ①】 (観察)</p> <p>【イ②】 (観察)</p> <p>【イ②エ①】 (観察)</p>
三 次	6	<p>おもしろ えらぶ</p> <p>みる</p>	<p>できたものを友達と一緒に見合い、切った形や組み合わせた形の面白さについて話し合う。</p>	<p>○友達と互いの作品について鑑賞し合い、互いの作品の面白いところ・すごいと思ったところなどについて自由に話すよう指導する。 T「気になるポイントを見つけながら興味のある作品を三つ選ぼう。」 友達と会話をしながら鑑賞することで、作品に対する想いを共有し、発想・構想を深める。 ◇友達の作品の良いところを探すよう指導する。</p>	<p>【エ②】 (観察 プリント)</p>

7 成果と課題

手だてに照らし合わせた成果と課題

○成果 ●課題

題材の工夫	○題材名から活動のイメージを膨らませ、板材の組み合わせ方（継ぎ方）を次々と自分なりに考えていた。
発話の工夫	○「今までに出合ったことの無い形に出合おう。」「深く考え込まず、思いきって切ってみよう。」などの発話により、児童が板材を大胆に切り分け、電動糸のこぎりの扱いに慣れ親しんだ。 ●立体的に組み合わせることで、板材の造形的な特徴を見つけていくという指導者のねらいが伝わらず、組み合わせることの無いパズルのような活動を追求した児童がいた。授業展開時の場面ごとの発話・発問を精査する必要がある。
環境の設定	○グループ形態の机配置にしたことで、友達と必然的に関わりながら製作をしていた。
交流場面・鑑賞の設定	○電動糸のこぎりを使用後、自席に戻る際に、「こんなの切れました。」「こんなの組み合わせました。」(以下、「合言葉」という)を友人に伝えるよう指導したことが、他人の考えに触れるきっかけとなり、自然と生まれると予想していたグループ鑑賞が深まった。 ●時間の経過とともに、合言葉も変えていかないと形式的な儀式に成り下がってしまい、効果が薄れてしまった。より効果を高めるには、場面ごとに効果が期待できる合言葉を設定する必要がある。 ●児童自らが自発的に鑑賞活動できる場面を指導者が意図的に設定するだけでは、一部の児童には入っていかず、協働的な活動としては効果が薄かった。効果を高めるためには、ミニ鑑賞会のような一斉に行う鑑賞活動が必要である。
評価	○学習シートから、「友達は自分に無い考えをもっていた。」「グループで行うことでアイデアが深まった。」「苦手だった図工が少し好きになった。」という児童の振り返りを見取ることができた。

8 授業の様子



【 板材の組み合わせ方を個々に試している様子 】



【 同じ班の友達と話しながら組み合わせを工夫している様子 】



【 互いの作品を見合い、面白さについて話している様子 】



【 糸のこぎりで切り分けた板材の様子 】

検証授業 小学校②

1 題材名「大発見！ひみつのたから島！」 A表現（2） B鑑賞（1） 対象 第3学年

2 題材の目標

破いて並べ替えた片面段ボール紙の形や特徴、題材名からつくりたい宝島の様子を想像し、材料用具の使い方や表し方を工夫して絵に表す。

3 題材の評価規準

	ア 造形への関心・意欲・態度	イ 発想や構想の能力	ウ 創造的な技能	エ 鑑賞の能力
題材の評価規準	片面段ボール紙を破いて、組み合わせながら形や表し方の工夫を考え、想像した島の様子を絵に表すことに進んで取り組んでいる。	材料の特徴や組み合わせた感じから、表したい島の形や様子など表したいことを考えている。	材料の組み合わせ方による島の形のつくり方や、表したいことに合わせて描画材の使い方を工夫している。	友達の表していることを見て、自分との発想や表現の違いに気付いたり、互いの工夫の良さを味わったりしている。
共通事項の観点から見た学習活動の具体的な評価規準	①紙を破いて組み合わせ、島の形を表すことを主体的に楽しもうとしている。 ②材料の特徴や形の組み合わせから、宝島の様子を想像し、絵に表すことを楽しもうとしている。	①材料の特徴を捉え、組み合わせながら自分の宝島のイメージを膨らませている。 ②友達の製作活動から造形的な特徴を捉え、表したいことのイメージを広げたり、作品に生かそうとしたりしている。	①形の組み合わせ方を考えたり材料を加工したりしてつくっている。 ②友達の表現方法を参考にしながら、材料や用具の使い方を工夫している。	①友達の表現から、考えのよさや面白さを感じ取っている。 ②自他の作品について、友達と話し合うことで、表したかったことや表し方の感じの違い、工夫などを分かろうとしている。

【評価規準に反映されている共通事項】

第3学年及び第4学年

- ア 自分の感覚や活動を通して、形や色、組み合わせなどの感じを捉えること。
- イ 形や色などの感じを基に、自分のイメージをもつこと。

4 研究主題との関連

(1) 学びの過程…本題材では児童が以下の「おもう」「えらぶ」「あらわす」「みる」の活動を繰り返しながら自己決定を積み重ねることで、児童の表現力が向上すると考えた。

学びの過程	学びの過程における児童の具体的な活動
おもう (思考)	・題材名から、活動のイメージを膨らませる。 ・友達の活動から面白い島の形のつくり方・表し方の工夫を見付ける。
えらぶ (判断)	・自分の表したい島のイメージに合わせて台紙を選ぶ。 ・友達の活動から参考にできる部分を見付け、自分の活動に取り入れようとする。

あらわす (表現)	<ul style="list-style-type: none"> ・片面段ボール紙をやぶいて様々な大きさや形の紙片をつくる。 ・宝島を想像しながら、形の組み合わせ方や、材料の特徴を生かした使い方をする。 ・参考にできる友達の活動を取り入れながら、自分の表現を深める。
みる (鑑賞)	<ul style="list-style-type: none"> ・自分のイメージを膨らませるために、製作途中の作品を随時鑑賞する。 ・製作が進んだ段階でミニ鑑賞会を行い、友達の作品の工夫を具体的に感じ取る。 ・鑑賞用のツールを使い、自分が作品世界に入り込んだ気持ちになることで鑑賞を深める。

(2) 手だて★協働的な活動 (活動形態・鑑賞活動)

題材の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・児童が自分の表したい活動をイメージできるような題材名を設定・提示する。 ・「学びの過程」の中で児童が自己決定を行うまでに、繰り返し材料を操作することが可能な題材を設定する。
発問・発話の工夫	<ul style="list-style-type: none"> ・児童のイメージ広がるような発話や、考える視点をもたせる発問を工夫する。
環境の設定	<ul style="list-style-type: none"> ★グループ形態の机配置にし、友達と必然的に関わる場面を設定する。 ・材料 (色画用紙) の置き場所を設置し、児童が選びやすい環境にする。
交流・鑑賞 場面の設定	<ul style="list-style-type: none"> ★班で大きな紙を分け合い、材料の共有から友達の表現に対し興味関心を高める。 ・指導者が製作中も鑑賞する視点を児童に示し、友達の表現に興味関心をもたせる。 ★製作中に児童が互いの活動の様子を見合ったり、話し合ったりする場面を設定する。 ★製作途中の作品を見合うミニ鑑賞会の場面を設定し、児童が友達のよい部分を参考にしつつ、自分のイメージを膨らませていけるようにする。 ・鑑賞用ツールを用いて児童自身が作品世界を旅するような視点をもたせる。
評価	<ul style="list-style-type: none"> ・座席表を活用し、活動の様子を見取る。 ・児童が自己評価できる学習シートを活用する。

5 指導観

(1) 題材観

本題材は、大きな片面段ボール紙を破いて様々な大きさや形の「大地のかけら」をつくり、組み合わせることで自分だけの宝島をつくって絵に表していく活動である。友達と紙を分け合う活動や、グループ机での製作、ミニ鑑賞会などの場面での協働的な活動を通して、児童が発想構想の能力を働かせながら自分の表したいことを見付けられるのではないかと考えた。また、児童が友達の表現のよさを知ること、さらに自分の表現を追求できることを願い題材を設定した。

(2) 教材観

片面段ボールは、幅が約1mのロール紙で、長さは50mあるため、大きさを生かした使い方ができる。活動の始めに班で協力して大きな紙を分けて使用することで、友達同士の関わりが自然に生まれ、互いの表現に興味関心をもたせられるのではないかと考えた。また、この材料の片面は平板な形状であるが、もう片面は波型の形状をしているため、使いたい面を選ぶことができる。小学生でも容易に手で破くことができ、描画する場合には表面の耐久性もある程度認められる。そのため、児童が材料をちぎったり丸めたりする行為を楽しみながら、様々な組み合わせ方を試す中で、自分の表したいことを見付けられると考え設定した。

(3) 材料・用具

児童：筆記用具

教師：片面段ボール紙 (1m×1.5m各班1枚配布)、四つ切色画用紙、アルミホイル、紙バンド、木工用接着剤、耐水性色ペン、チョーク、おぼん、はさみ、共用材料箱 (あまった土地ボックス)

6 題材の指導計画と評価計画 (全6時間) ※ 過程 : 学びの過程 協働的な活動

次	時	過程	◎学習内容 ・学習活動	○指導上の留意点 「 ↑ 」主発問 ◇支援◆支援 (つまぎの様子のみられる児童への支援)	【評価規準】 (評価方法)
一次	1	おも	◎題材に出会う。 ・宝や宝島について考える。	○宝や、宝島のイメージを共有する発問をする。 ○児童の発想を促す題材名の提示方法、導入の発問をする。	【ア①】 (観察)
			班で協力して、大きな紙を破り、一人分ずつに分ける。	班の中での造形的な交流が生まれるような発問をし、互いの表現活動に対する興味関心を高める。その際、材料を平等に分けるように指導する。	
		あらわす	◎自分の分の紙を破り、いろいろな形、大きさを考えながら大地のかけらをつくる。	◇宝島になる大地のかけらなので、いろいろな大きさや形をつくるように考えながら、破るよう声を掛ける。	
		みる	つくりながら友人の表現を見て、参考にする。	紙の破り方や形などを工夫している児童に対し、価値付けをし、紙の破り方や形の工夫に児童が更に興味関心をもつようにする。	【イ①エ①】 (観察 学習シート)
		えらぶ	◎海(台紙)にする色画用紙を、自分の宝島のイメージに合わせて選ぶ。	○台紙を選ぶ際、自分の島のイメージを広げさせるように発問し、選択する意識をもたせる。 ↑「自分の島に似合う海の色を選ぼう。」	
	2	あらわす	◎台紙の上に宝島の形をつくる。	○紙の特徴や形を生かし、島の形をつくることを意識させる声掛けをする。	
	みる	友達の作品を鑑賞し、表し方の工夫に気付く。	ミニ鑑賞会を行って鑑賞の視点を意識させ、発想構想を深める。		
	あらわす	鑑賞から気付いたことをもとにさらに構想を深め、貼り方を決めて貼る。	◇鑑賞して気付いたことを全体で共有し、構想を具体的にもたせる。 ◆指導者が組み合わせの方法を幾つか提示しイメージを深める考えを引き出す。		
二次	2	みる	◎前時の活動を振り返りながら、友達の作品を鑑賞し、表し方の工夫を見付ける。 ◎宝島の構想を深め、絵に表す。 ・宝をつくる。	○前時の鑑賞活動を振り返り、作品をいろいろな角度から見る鑑賞の視点を指導し、児童の発想を引き出す。 ○描画材や副材料、支持体の扱いについて指導する (チョークは色を重ねたり、ぼかしたりでき	【ア②】 (観察)

		えらぶ	・島の形を付け足す。 ・イメージに合った描画材を選択し、絵に表す。	る。紙の凹凸によって描きにくい部分は、つぶして平らにすると描きやすい。)	【ウ①②】 (観察作品)
		あらわす	友達の表し方を参考にし、宝島全体の構想を深め、絵に表す。 ・宝を貼る場所を決める ・場所の表し方を工夫する。	友達の考えのよさや面白さ、表し方の工夫を意識しながら活動することで発想力を高める。 ◆友達の作品をヒントにできそうな部分を示し、最終的に取り入れるかは児童に選ばせる。	【イ②】 (観察作品学習シート)
三次		みる	小さい自分の船をつくり、友達の作品を旅するように鑑賞する。 ・友達と作品の面白さについて話し合う。	鑑賞用ツールと鑑賞カードを活用する。 友達と会話をしながら鑑賞することで、作品に対する想いを共有し、発想・構想を深める。 面白いところ・すごいと思ったところなどについて自由に話すよう指導する。	【エ②】 (観察学習シート発言)
		あらわす	◎自分の作品に船を貼る。 ◎活動を振り返る。	T「気になるポイントを見付けながら興味のある作品を三つ選ぼう。」 ○自分の作品に、旅から帰ってきた船を貼るよう指導する。 ○活動を通して、気付いたことや感想などを振り返る発問や、学習シートの設問を工夫する。	

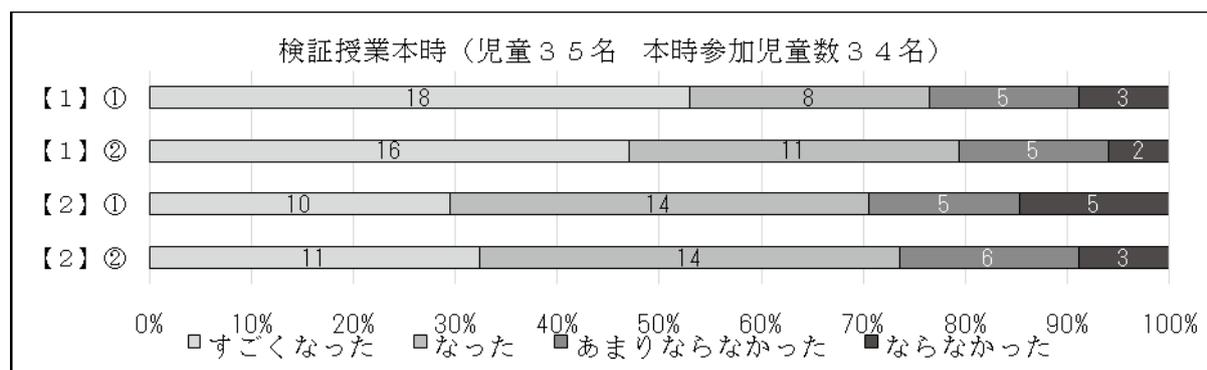
7 成果と課題

(1) 検証授業学習シートの結果比較 (児童 35名 本時参加児童数 34名)

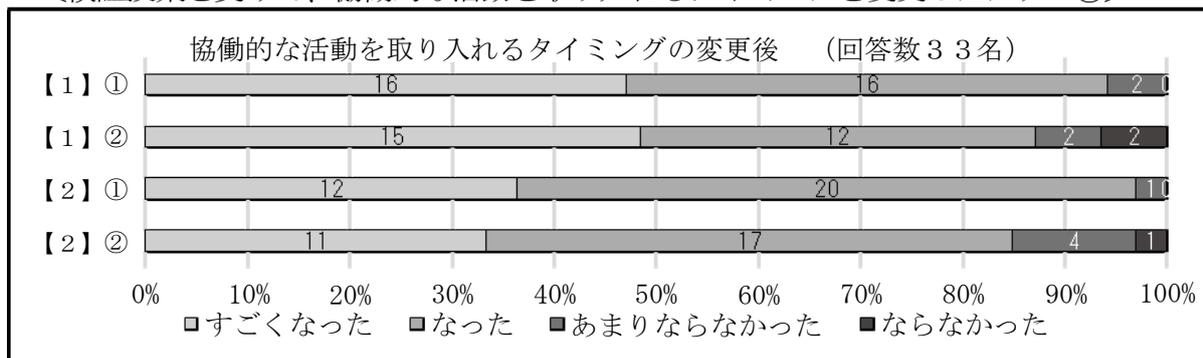
以下の設問により、二つの学級で学習活動に対する児童の自己評価を実施し、展開の違いによる結果を比較する。

【1】 つくる活動について
① 班の友達と大きなダンボールをやぶく活動をすることで、海底火山で大地がバラバラになることをイメージしたり、これから何をつくるのかなとワクワクドキドキするきっかけになったりしましたか。
② やぶいた段ボールの形からおもしろい形を見付けて、友達とおもしろさを話すことで、つくりたい作品のイメージがふくらみましたか。
【2】 鑑賞の活動について
① 自分で島の形を考えた後、友達の島を旅することで、自分の島の形や作りたいものが決まるきっかけになりましたか。
② 友だちの島を旅した後、見付けた友達の島のよさを班の友だちと話すことで、自分のつくりたい島のイメージが広がりましたか。

[検証授業を行ったクラス①]



【検証授業を受けて、協働的な活動を取り入れるタイミングを変更したクラス②】



(2) 手だてに照らし合わせた成果と課題

○成果 ●課題

題材の工夫	<p>○材料の片面段ボール紙と題材名の「宝島」というテーマ設定の組み合わせは、児童にとって思いを広げやすく、形から見立てることや、試しながらつくることができる操作性を生かした表現ができた。</p> <p>●段ボールをむやみに細かくちぎって積み上げるような活動を追求した児童がいた。ちぎる目的と大きさの目安を視覚的に示し、共通理解を図る。</p>
環境の設定	<p>○グループ形態の机配置にしたことで、友人と必然的に関わりながら製作をしていた。</p>
交流場面・鑑賞の設定	<p>○班で大きな紙を分け合ったことから、自分と友人の作品世界のつながりを自然と意識し、相互鑑賞が活発に行われていた。</p> <p>○教師の発問により交流の場面が生まれ、児童が友人の表現に目を向けることができ、活動開始時の発想のつまずきが解消できた。</p> <p>●ミニ鑑賞会のタイミングが早かったため、効果が不十分だった。児童同士の学び合いが深まるためには、自分の思いがある程度形になってきた活動の中盤から終盤の段階で、児童が「見たい」「見せたい」という気持ちになっているタイミングで行う必要があった。</p> <p>●ミニ鑑賞会で児童に鑑賞の視点を明確にもたせる発問が弱かった。全員が一斉に見る時間を確保することで、活動の質を高めることが必要であった。</p> <p>●ミニ鑑賞会后、児童が気付いたことを発表する場を設けて全体で共有し、協働的な活動からの表現の価値付けを行うことが必要であった。</p> <p>○別の学級で、検証授業の本時の展開を変更して宝を先につくり、島の形も接着剤を使って貼り形ができてきたタイミングで鑑賞を実施したところ、学習シートの自己評価から協働的な学びの成果を児童が感じていることを見取ることができた。</p> <p>○鑑賞用ツールの船は、楽しく自然に鑑賞を深めるために有効であった。</p>



【大きな片面段ボール紙を破いて分けている様子】



【島に色をつけて風景を表している様子】



【洞窟の中に宝を隠している様子】

VII 成果と課題

1 中学校

伝えたい内容を伝えるために形や色彩の効果を考えることは大切で、この部分に焦点を当て協動的な活動を取り入れることに効果があるのではないかと仮定し、検証授業を行った。生徒への作品完成後の鑑賞学習シートのアンケートの結果、配色を検討するグルーptークを「とても参考になった」と答えている生徒が61%おり、「少し参考になった」の34%と合わせるとほとんどの生徒にとって効果のある活動であったといえる。(表1参照) 生徒が感じているだけではなく、実際の作品と学習シートを教師が見比べ、生徒が感じたように、実際に有効であったのかを検証した。

表1 (在籍120名 検証生徒105名 欠席・未記入15名)

	とても参考になった	少し参考になった	あまり参考にならなかった
※生徒	65名 (61.9%)	35名 (34.3%)	5名 (4.8%)
学習シートの記述と教師の見取り	87名 (82.9%)		18名 (17.1%)
	<p>【 発想が広がった生徒 】 68.6%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ほかの作品も見られるから想像が広がった。 ・イメージがまとまらなかったときに、配色カードを使って一緒に考えてくれたので、イメージどおりの作品をつくることができた。 ・自分が気付かなかった部分に気付くことができたから。 <p>【 自分の案に自信がもてた生徒 】 14.3%</p> <ul style="list-style-type: none"> ・客観的に見てもらうことで、考えとは違う案や細かいところまで気付けるようになった。 ・配色案では自信がなかったけれど、グルーptークをして自信をもって塗ることができた。 		<ul style="list-style-type: none"> ・自分の思いがなく、アドバイスを頼りきっている。 ・技能的に表現しきれていない。 ・アドバイスがもらえなかった。

(1) 成果

アンケートの結果から、ほとんどの生徒が、配色検討において協動的な活動が参考になったと答えている。色と形を総合して表現する配色の検討は、生徒が苦手と感じやすい部分である。そこに協動的な活動を取り入れることで、生徒は自分の考えに自信をもって自己決定でき、自信のない生徒もグループで話し合うことで、発想を広げ、再検討することができた。また、学習シートの記述から、「自分の作品を人に説明することで、客観的に見ることができた。」や「いろいろアドバイスをもらったけれど、自分の案でいこうと思った。」など、広げた選択肢の中から、試行錯誤し、自己決定をして、着色へと進む生徒の姿が見られた。

また、配色だけでなく、平塗りをするなど技能面での気付きにつながった生徒もいた。多くの生徒は、配色を検討する時間を設けたことで、着色の途中で色の微妙な色の違いに悩む生徒が少なく、自分のイメージする色を配色カードなどを参考にしながらすぐに作ることができた。自分の配色を人に説明したり、

話し合ったりすることで、自分が伝えたい絵文字のイメージをより明確にもつことができたと言える。

(2) 課題

教師が学習シートの記述と作品を改めて見比べてみると、生徒の中には、配色の検討の時点で自分の作品コンセプトを明確に書けていなかったり、「色を教えてほしい」というように、アドバイスを頼り切ったりしている生徒も数名みられた。また少数ではあるがアドバイスをもらっても、技能的に表現しきれずにいる生徒もいた。普段から絵がうまいなど、技能面で優れている生徒には、美術への苦手意識から躊躇して意見を伝えられない生徒もいた。客観的に鑑賞して、互いに批評し合うような指導が必要である。そして、批評し合うためには、三要素など色彩についての基本的な知識を身に付けさせたり、学習シートを工夫し、質問や答え方の例などを載せたりすることも有効であることが分かった。伝えたいイメージを表現する発想と技能は両輪であり、生徒が自分の伝えたいことを表現できるような基礎的な技能の習得も不可欠である。

以上のことから、グループトークを行う前に生徒自身が自分の伝えたいことや制作を進める上で悩んでいることなどを明確にすることで、グループトークで得たことを必要に応じて自分の作品の制作に生かすことができることが分かる。このことは、仮説で挙げている「他者と自分との価値観の違いに気づき、試行錯誤しながら他者と異なる自分独自の答えを生み出す力を高めることができる」ということであり、このように協働的な活動の場を効果的に取り入れることで、他者との関わりから見方や感じ方を広げ、創意工夫して表現する生徒の姿を見ることができた。

2 小学校

小学校では、「人やものに関わりながら、表したいことを見付け自分らしさを発揮しながら表現する児童」の育成を目指し、児童一人一人の学びの過程を重視した授業展開に協働的な活動を取り入れることで発想や構想の能力を高められるのではないかと仮定し、検証授業を行った。

二つの検証授業の分析により、協働的な活動は児童の「発想・構想の能力」を高めるのに有効な手だてであると言える。しかし、鑑賞や話し合いの活動をただ設定するだけでは十分な効果は得られない。授業のねらいに即し、図画工作科の教科の特性を生かした活動でなくてはならない。図画工作科における協働的な活動の効果的な指導の工夫について、二つの検証授業から得られた成果は以下の通りである。

(1) 学びの過程（「おもう・えらぶ・あらわす・みる」）について

それぞれの過程は一過性のもので無く、また規則的に順番通りに進行していくのでもない。児童一人一人の行きつ戻りつといった試行の積み重ねや表現を通して、それぞれの過程は密接に関連し合いながら、螺旋的に絡みつつ発展しながら現れるものである。

今回の検証授業を行うにあたり、指導者が指導計画を考える際に、各過程において予想される児童の反応に対し、材料や用具の提示、発問・発話などの具体的な手だてを事前に準備しておくことで、児童の思いや選択決定を大切にしたい主体的な表現につなげることができた。

また、発想のきっかけとなる導入における題材との出会いの場面では、題材名と初発問が児童のイメ

ージを引き出す「おもう」過程に大きく影響し、そこで生まれたイメージが直後の「えらぶ」「あらわす」へと直線的につながっていくことを見取ることができた。このことから、興味関心・意欲を高めるキャッチコピーのような言葉の要素だけではなく、児童の発達段階を踏まえた上で、授業のねらいに沿った活動や行為から言葉を吟味し、題材名や発問を決定していくことが重要であることが分かった。

さらに、児童一人一人が自分らしい表現を追求していくには、「えらぶ」過程が重要である。児童の発想・構想の能力を高めるには、作品の完成形やそれに至るまでの過程を教師の意図に基づいて固定化するといった教師主導型の授業ではなく、題材のねらいに応じて材料や用具、表現方法や主題など児童自身が自己決定できる場を保障することが欠かせない。このような場を保障することで、児童の作品に対する思いが更に高まり、「もっとこうしてみたい」という思いから、発想・構想の能力が高まることにつながるということが分かった。

(2) 協働的な活動における「活動形態の工夫」、「鑑賞活動の設定」について

児童の発想・構想の能力に働き掛ける協働的な活動として、本研究では「みる」過程を発端として位置付け、鑑賞活動での有効性を探った。二つの検証授業から、授業の途中段階（主に「あらわす」過程）において、協働的な活動を取り入れることで、近年強く叫ばれている「鑑賞と表現の一体化」を意図的に設定しつつも、自然な形で実現できることが分かった。

第一は、児童の中に自然発生的に生み出す鑑賞活動である。

座席配置や材料置き場、活動場所など主に児童の動線、視野を考慮した環境設定を意図的に行うことで、協働的な学びの場を生み、児童の「みる」を誘発することができる。児童の手を止めずに活動を進めながらも、周囲の友達の実践や行為を鑑賞し、必要に応じて自身の表現に取り入れさせることが可能である。しかし、この環境設定による自然発生的な鑑賞活動は、一部の児童のみになってしまうこと、また、互いに学び合うといった双方向のコミュニケーションでなく一方向のコミュニケーションで完結してしまう可能性が多いため、補助的に取り入れると良いと考えられる。

第二は、授業展開の中に意図的に設ける鑑賞活動である。

本研究では、児童の手を止めることなく互いの表現について報告し合う方法と手を止めて全体でミニ鑑賞会を行う二つの方法を取り入れた。どちらの方法も一長一短ではあるが、鑑賞の時間を設けて全員が鑑賞し、お互いの表現について学び合うことは、様々な価値観を共有できることから、児童の発想・構想の能力に有効であると言える。その際、協働的な鑑賞活動を取り入れるタイミングを吟味し、鑑賞の視点を明確にすることが重要であることも分かった。

タイミングについては、自分の表現したいことや思いが形になってきた段階、又は活動の中で行き詰まったり、新たな展開（表現の発展、材料の追加など）が生まれたりしたときに設定すると、児童同士の学び合いを深めることができると考えられる。児童にとって「みる」必然性、すなわち伝えたいこと知りたいことなどがなければ、そこに学びの場は成立しない。そのためにも、教師は児童一人一人の過程をしっかりと見取らなくてはならないということも分かった。

また、一斉・グループなど、どの形態の活動であっても、活動をさせて終わりではなく、必ず最後に気付いたことを発表し、互いに感じたことや考えなどを共有し、教師が授業のねらいに沿った観点で価値付けして子供にフィードバックすることが必要である。こうすることで、見たことや感じたことを新たな視点として意識できたり、自分の考えていたことに対して自信をもったりすることにつながる。こ

の積み重ねが、その後の製作をする際に生き、発想・構想の力を高めることにもつながる。

話し合いなどの言語活動は、互いの気付きを一番理解しやすく取り入れやすい手段であるが、児童の国語力が課題に挙げられることが多い。感じたことや思いをもってはいても語彙の少なさからうまく伝えられない児童については、自分の感じたままの言葉で表現させるとともに、色や形、イメージなどについて共通事項をもとに教師が支援的に価値付けしていくことで、経験的に学んでいくようにする。

さらに、その場に応じた鑑賞の視点を児童に示すことで、共感や課題意識をもって児童は鑑賞し、友達の良さに気付くだけでなく、視覚的に得た情報を取捨選択し、自分の表現と比較するなどの造形的思考力を働かせることができる。

グループ隊形による机での活動や場の設定の工夫、鑑賞活動の設定などは、多くの図工専科が日常的に行っていることであるが、これらの活動が児童の発想・構想の能力にどのような効果をもたらしているか、授業のねらいに即しているかを精査し、意図的に行うことで更に指導の効果は高まると考える。

以上、二つの検証授業から研究仮説に基づいて言及してきたが、図画工作科において、学びの過程に協働的な活動を効果的に取り入れることは、作品などの表現力の育成にとどまらず、それらを支える発想・構想の能力に有効に働き掛け、その過程において発揮される造形的な思考力、判断力の更なる育成につながっていくものであると考える。

3 小中合同

小学校図画工作科と中学校美術科の合同部会では、児童・生徒一人一人が思いをもって表現方法を探り、「自分らしく表現する」ために研究を行ってきた。児童と生徒の発達段階や校種の違いから、研究員同士学ぶことも多くあり、改めて互いの授業を知ること、小学校と中学校が連携していくことの大切さを実感することができた。

小学校と中学校の検証授業で共通する点として挙げられることは、「自分らしく表現する」ためには、まず「おもい」をもつことが重要であるということである。「おもい」をもつためには、「みる」鑑賞を授業の中に効果的に取り入れ、教室全体でお互いの「おもい」を共有しながら表現の幅を広げていく必要がある。今回の検証授業を通して、小学校の中学年からでも協働的な活動を取り入れた鑑賞の活動は有効であることがアンケートからも確認できた。また、中学校では、協働的な活動を取り入れることで、他者との比較の中で自己を見つめ、自分の考えを整理したり、自分では思いつかなかった表現を参考にしたりしながら、自分らしい表現を試行錯誤して見いだしてく姿が見られた。

図画工作科と美術科では、「自分らしく表現する」ことが大切である。そのために、協働的な活動は自他の特徴に気付き、受け止め、多様な価値観の中から改めて自らの良さを発見したり、再認識したりする場となることに意味があると考え、研究を行ってきた。検証授業を振り返り、学びの過程の中で協働的な活動を効果的に取り入れることで、対話的な学びが生まれ、児童・生徒の学びの過程も深まり、主体的に学ぶ児童・生徒の姿を見ることができた。

中学校で「自分らしい表現」を見出ししていくためにも、小学校の段階で、多くの人やものに関わる体験をすることは大切である。試しながら自分で「えらぶ」活動を繰り返し、児童の発想・構想の能力を高め、義務教育のしめくりとなる中学校で、自分の思いを自信をもって表現できる力を9年間の見通しをもって育てていくことが大切である。

平成27年度 教育研究員名簿

小・中学校 図画工作・美術

地区	学校名	職名	氏名
杉並区	杉並区立天沼小学校	教諭	◎ 今井 薫
世田谷区	世田谷区立花見堂小学校	主任教諭	上野 果菜子
新宿区	新宿区立四谷小学校	主任教諭	佐藤 美里
江戸川区	江戸川区立船堀第二小学校	主任教諭	保科 綾子
府中市	府中市立府中第二小学校	主任教諭	森山 暁生
東久留米市	東久留米市立南中学校	主任教諭	○ 橘川 小夜
清瀬市	清瀬市立清瀬中学校	教諭	平岡 いづみ

◎ 世話人 ○副世話人

[担当] 東京都教職員研修センター 研修部 教育開発課
指導主事 菅野 恭子

平成27年度

教育研究員研究報告書

小・中学校・図画工作・美術

東京都教育委員会印刷物登録

〔平成27年度第197号〕

平成28年3月

編集・発行 東京都教育庁指導部指導企画課

所在地 東京都新宿区西新宿二丁目8番1号

電話番号 (03) 5320-6849

印刷会社 正和商事株式会社

リサイクル適性[®]

この印刷物は、板紙へ
リサイクルできます。